

演劇手法をつかった安全ワークショップの実施とその可能性

うさぎママのパトロール教室主宰

安全インストラクター

武田 信彦

info@usagimama.com

www.usagimama.com

【安全教育の現状】

子どもの安全をまもることは社会において大きなテーマです。全国的にも保護者や地域住民によるパトロールなど防犯ボランティア活動がひろがり、その数は4万団体にまで増えています（警察庁発表2010年）。市民による防犯活動や安全に関する取り組みは、この10年ほどですっかり身近なものとして定着しつつあります。

また、学校のなかにおいても積極的な安全教育が実施されています。交通安全教室をはじめ、セイフティ教室や安全教室とよばれる防犯・安全への知識や啓発を目的とした時間が年間スケジュールに組みこまれるようになりました。

『いかのおすし』の防犯標語を柱におこなわれる警察の防犯教育プログラムをはじめ、犯罪学・社会学などの研究者によるプログラム、防犯活動や安全アドバイスをおこなう実践者によるプログラムなどいくつかの安全教育のアプローチがおこなわれています。

【開発にあたって】

10年以上にわたり安全教室をおこなっているなかで、教室型による啓発プログラムの限界を感じていました。子どもたちはすでに『気をつけること』、『注意すること』は知っているわけですが、身をまもることについて身体をつかって体験する機会はほとんどないのが現状です。

そのようななか、ワークショップデザイナー育成プログラムの受講、防犯

演劇ワークショップの研究プロジェクトへの参加をとおして、田野邦彦（演出家・青年団リンクRoMT主宰）、わたなべなおこ（演出家・劇団あなざーわーくす主宰）と出会い、演劇やワークショップの手法を用いたあたらしいかたちの安全教室として『あんぜんパワーアップセミナー』を開発・実施することとなりました。

私が『安全のコツ』として伝えているもののなかから、予防としての『よく見る』『よく聞く』、対処法としての『にげる』『つたえる』を、それぞれ身体をつかったゲームをとおして体験し、自ら気づくことができるプログラムとしてデザインしました。

【プログラムの内容】

2010年2月より、小学校や児童館、民間施設などにおいて実際にプログラムを実施することとなりました。ここでは、おもに小学校の体育館での実施のようすをご紹介します。

なお、実施にあたっては、主催者との事前調整をおこない、スケジュール、人数、会場、ご要望などをお聞きします。

○会場づくり

体育館に4つの“ゲームエリア”を設置します。体育館にある備品などをつかって間仕切りや空間づくりをおこないます。

○4つのゲームエリア

参加者は、はじめに全体でのワーク（あいさつ、導入のゲームなど）を経て、4つのグループにわかれてゲームへ参加します。それぞれのエリアにはファシリテーターがおり、ルール説明などをおこないながら約15分間ゲームをおこないます。

- ・よく見るゲームエリア：しっかり確認！ハンカチおとしゲーム
- ・よく聞くゲームエリア：気になる音ってどんな音？音さがしゲーム
- ・にげるゲームエリア：新聞棒で距離のトレーニング、ちょっとかわった鬼ごっこ
- ・つたえるゲームエリア：みんなで伝えよう！ジェスチャーゲーム

○ふりかえりと共有

各エリアでは、『安全に役立つコツがはいつたゲーム...』とのみ紹介し、ゲーム終了後に参加者へ質問をおこないます『安全のコツは何だったでしょうか?』。たくさんの答えが出るなかでファシリテーターは正解をあえて言わず、次のゲームへと移動します。

そして、最後に全体であつまり、各ゲームをふりかえりながらそれぞれにふくまれていた安全のコツについて説明し共有します。

【実績】

『あんぜんパワーアップセミナー』は、2010年2月からの1年間で全国各地の小学校、児童館、民間施設等27か所において計約1,570名が参加されました。開催規模は、数10名から150名を超えるまでさまざまです。

また、2010年8月には、第4回キッズデザイン賞フューチャーアクション部門にて優秀賞を受賞いたしました。審査員の講評では、『生きる力を育むためのワークショップ』として高い評価をいただきました。

□キッズデザイン賞とは：子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン、創造性と未来を拓くデザイン、そして、子どもたちを産み育てやすいデザインの顕彰制度です。

【これから】

『あんぜんパワーアップセミナー』のひとつの特徴は、世代を超えて参加することができるにあります。大人も子どもも一緒に遊ぶなかで安全のコツに気づくだけでなく、楽しい記憶を共有しながら家庭での会話のきっかけになればと思っております。また、保護者のみならず、地域や学校などに関わるおおくの大人たちが一緒に参加することで、つながりを生む効果にも期待しています。そのつながりこそ、子どもたちが地域のなかで安全に暮らすための大きな力となるからです。

一方、これからの課題としては、ファシリテーターの育成が必要となります。大勢の参加者が安全にゲームに参加し、“安全に役立つコツ”に気づくための空間づくりがおこなえる人材の育成や確保は大きなカギとなります。

ところで、最近のご依頼先では、保護者や地元の方にサポートをお願いして一緒にワークショップを運営できる地域も増えてきました。今後、高校生や中学生がファシリテーターをおこない、小学生に安全のコツを伝えることができるプログラムなどにも展開が可能だと思っております。

これからも、参加者同士のコミュニケーションや気づきを大切にデザインをすすめていきたいと思っております。

ありがとうございました